子どものための造形教育施設の考察

新井　義史

はじめに

地方自治体によって造られる公共施設の中に、子どものための設備を備えた美術館や造形活動施設が生まれてきた。1985 年に設置された「おかざき世界子ども美術博物館」や「子どもの城」は、我が国における「子どものための創作・体験型施設」の初期の例である。したがって、まだ十数年の歴史しか持っておらず、その内容や運営は今後の検討に委ねられている。完全学校週５日制の実施に向け、学校外活動の充実が求められている中で、子どものための造形活動施設は、今後一層増加していくことが予想される。

本稿は、学校外の「子どものための造形教育施設」の現時点での状況確認を行うことを目的としている。「・、学校外の造形教育の場」では、従来から行われてきた、社会教育としての造形（美術）教育の分布を確認した。「・、日本における新たな施設例」では、新しいタイプの３施設を取り上げ検討を加えた。「・、創作・体験型施設の考察」では、造形活動施設の体験活動の特徴を、他分野の体験型施設との比較の中で考察した。

なお、本稿では「施設」という用語を、「機関」の意味を含めた幅広い意味で用いている。

・、学校外の造形教育の場

１、美術館

従来わが国では、美術という概念の理解を欧米並の美術館や欧米並の芸術家像の中で捉えており、身近な美術についての明晰な理解がないという点とともに、子どもの造形活動と大人の作家のそれとを基本的に分化して扱う傾向があった。そうした構造と体質の中で、アートがごく日常的に必要なものであるというような認識は稀薄であったと言わざるをえなかった。旧来の美術館は、「美術の歴史の殿堂」であり鑑賞を主とした教育の場であるとした、固く閉鎖的なイメージがあった。そこには、大人のしかも関心を寄せる一部の人間のための文化活動の場としての認識が一般大衆の中には根強くあった。したがって、子どもの鑑賞者はとりわけ特殊な存在として、美術館では十分なサポートなしに扱われてきた。子どものための美術館教育という問題は、かねてより必要性もあり要望もされてきた。常に理想的とされていたのは、欧米の規模の大きな美術館で実施されているような、20 人程度の子どもを一つの単位として床に座らせ、先生あるいは学芸員が他の鑑賞者のじゃまにならないようにしながら対話形式で鑑賞教育をするスタイルであった。しかし、日本の美術館には子どもの美術館教育を担当するとい 、余裕はなかなか出てこなかった。その一方、学校教育の立場からは、地域の美術館と組んで何か新しい教育プログラムを創案し、実施しようとしても学校現場の時間数や学校行事の規定からも割り込むゆとりはなく、相互の交流関係はいたって閉塞的状況にあった。

近年、社会教育機関としての美術館側からの教育・普及分野への活動の広がりに伴い、こ

れまでの作品解説、講演会などのレクチュアー形式の教育活動に加えて、市民へのアトリエの提供や多様なジャンルの技法講座、図書資料の公開など、工夫を凝らした活動が実施されるようになってきた。大人への教育活動の充実傾向と同様に、子どもに対しても、創意に満ちた鑑賞プログラムや教育的な活動が実施されるようになってきた。アートツーリングと名付けられた、セルフガイドやワークシートを併用してのギャラリートーク、移動美術館、子どもと親が同時に鑑賞出来るような平易なテーマ設定による展示企画など、従来の鑑賞活動の枠にとらわれない多様な試みが行われるようになってきた。これら鑑賞を中心とした活動以外に、体験的要素を取り入れ、触れる・動かすなど、対象物への積極的な行動を起こすことで遊び心を伴って作品と接することが可能な展示形態の考案、さらには行為を重視した創作活動やワークショップなど、実技的内容を含む企画などが意欲的に行われるようになってきている。

２、地方自治体の社会教育

社会教育は、「学校教育（教育課程として行われる教育活動）以外の教育機会の総称」を指し、狭義には、学校教育の対置概念に置かれている。広義には、社会における人間形成にかかわる環境条件の全てを対象とし、奨励のための施設の設置、学習機会や必要な資料の作成など、環境条件の整備は、国および地方公共団体の任務とされている。音楽や演劇などの文化イベントをはじめとし、市町村主導の文化祭や子ども祭りなどのプログラムは社会教育事業として、日常生活における交流や親睦の目的を兼ねて活発に行われている。

社会教育における造形分野は、わが国の経済的発展、生活の豊かさの実現に伴って、文化や芸術への関心の高まりの中で積極的な関心が浮上してきた。いわゆる公民館活動と呼ばれる成人を対象とした活動の中には、従来から実技指導を含めた住民のための文化活動を可能とする恒常的な場が設定されていた。これらは、趣味・娯楽・文化活動など、グループ活動的要素と楽しみを軸とした自主的な活動によるコミュニティ作りを目的としている。住民の自己実現・個性的なライフスタイルの創造にとって、こうした造形教育形態の環境整備はいっそうその必要性を増している。また、完全学校週５日制の実施に向け、増加した休日に、子どもたちの学校外活動を提供する体制整備の問題は、従来以上に家庭教育・学校教育と社会教育との関係を複雑にしつつある。

３、児童館

児童館は、児童福祉法に基づき設置された「児童福祉施設」である保育所、精神薄弱児施設などをはじめとする 14 種類の施設の一つ「児童厚生施設」に属している。児童厚生施設は、「児童遊園」と「児童館」の２種類を含み、「健全な遊びを与えて、その健康を増進し、又は情操を豊かにすることを目的」としている。1963 年に厚生省通達により、設置および運営費に対する国庫補助が開始されてから児童館の数は増加し実質的に機能し始めた。70 年代半ば以降はそれまでの要保護児童の保護を主たる機能としていたのに対し、社会の変動による児童問題に対処するため、留守家庭児童の保護・育成機能、運動や遊びを通じて体力増進を図るための指導などの機能を持たせ、広く家庭や地域社会を支える役割を担うようになってきた。子どもの遊び空間、仲間意識を回復していく上で、社会教育施設として果たす役割には大きなものがあるとされる。

児童館は 17 歳以下のすべての児童を対象にしているが、利用者の多くは小学生である。児童館には、児童厚生員の配置が義務づけられており、来館する不特定多数の小中学生を対象に遊びや工作、文化活動などの指導・援助を行っている。児童館の主な目的は遊びを通

じて健全な育成活動を行うことであるから、評価はなく、明確なカリキュラムも作成はしないのが基本方針である。この点が学校教育とは大きく異なる点といえ、学校ではあまり行うことが出来ないような内容の活動に力を入れている。造形的な活動に積極的に取り組んでいる所も見られ、似顔絵コンクール、飛行機・凧づくり、創作手工芸、年賀状づくりなどはその一例である。

４、民間（個人・企業）

子どもを対象とした個人経営の小規模な造形教育活動は、一般的に絵画教室や画塾（お絵かき塾）と呼ばれ情操教育の一旦を担っていた。昭和 30 年代半ばの児童画展過熱時代には、絵画を指導する民間教育は盛んであったが、その後は知育教育、音楽教育、スポーツ教育への関心が強まり、絵画教室に通う子どもたちの比率は相対的に低下してきた。現在では子ども以外にも、一般社会人を対象にした新聞社やデパートが開設する複合的なジャンルを扱うカルチャーセンターに関心が高まっている。朝日新聞社主催による朝日カルチャーセンターの開設は 1974 年であり、西部百貨店も 5 年後の 79 年にコミュニィティカレッジを開いている。これらを初めとする企業文化活動は、直接利潤と結びつけられない「メセナ（文化の擁護）」的なものも含まれている。アマチュア活動の活性化として、美術団体展が果たしてきた役割も、造形教育活動の一つとして数えることができる。美術団体展の功罪は相半ばするが、制作活動への刺激と参加者間の相互交流など、個人の積極的な活動を促進させる実践の場の設定としては評価できるであろう。

余暇社会の出現は、レジャーの大衆化や自己実現要求を増大させ、併せて地域作りの重点化として地方自治体における文化・スポーツ振興の強化がなされようとしている。その一方で学校教育の画一性・限界性批判があり、多様な民間教育産業の台頭がある。こうした中で、幼児から社会人一般にいたるまで、造形活動が、学校の美術室での制作活動といった狭い意味での自己表現活動にとどまらず、家庭や地域社会の生活一般にまで広がりうるような条件整備が次第に整いつつある。

・、日本における新たな施設例

　ミュージアムという言葉が指し示すものには、歴史・芸術・民俗・産業・自然科学など、一般的にはあらゆる種類の博物館的機能を備えた施設を含んでいる。そこには、さまざまな立場のさまざまな年齢層に応えうるための驚くほどのバリエーションがある。法律・行政いずれの点からも社会教育施設として位置づけられているミュージアムは、昨今の生涯学習ブームの中で、文化財の保護・研究活動を中心としたミュージアム側から利用者への、一方的なメッセージの投げかけではなく、利用者とのコミュニケーションの活性化に意を注ぎ、その相互協力態勢の中で館自体が成り立つ傾向も強くなって来ている。既設の美術館は施設・設備面の制約からも、いずれにせよ鑑賞活動を主体とした中での教育活動を拡大・工夫することに対し、新設されるミュージアムの中には、子どもに対象をあて、加えて体験や創作活動にポイントを置いた構想も生まれてきた。本章で取りあげた３つの施設は、日本における、子どもの活動に視点をあてた新しいタイプのミュージアムの代表的な例といえる。いずれの施設も、設立の背景やその目的や果たすべき機能も異なっているが、わが国に将来、設立されていく施設のプロ g タイプとして位置づけることができよう。

１、おかざき世界子ども美術博物館

・設立の背景と目的

岡崎は、従来より小中学校の児童・生徒の造形活動が活発に行われていた土地柄であり、住民全体の美術教育に対する理解には深いものがあった。1964 年以来催されてきた「造形おかざきっ子展」は、１年に１度子どもたちの造形作品を一堂に展示する大々的な「造形作品展」として知られており、そこに見られる作品は、当時一般的に催されていた児童・生徒の美術展の域を大きく越え、造形遊びの要素を持たせたダイナミックな野外展示をも含んでいた。

おかざき世界子ども美術博物館は、この「造形おかざきっ子展」が推進の原動力となったものである。収蔵されている世界の子どもたちの絵や民芸品、玩具、教科書などは各国の大使館、ユネスコからの支援を受けたものであり、くわえて篤志家、海外の日本人学校勤務の教員、郷土の美術家たちのチャリティなどによる市民総ぐるみの収集活動の成果である。したがってこの施設は、地域の美術教育に携わる指導者、関係者をはじめとする長期にわたる地道な活動の結晶として建設された施設である。児童画の収集と研究、世界の子どもたちとの交流､創作実習指導などを通じて次代を担う子どもたちに国際的視野を与え、表現の自由・自分で作り出すことの喜びを味わわせるとする、親を含めた子どもたちへの教育的役割を明確に定めた美術博物館であるといえよう。

・施設概要

おかざき世界子ども美術博物館は、岡崎市街が一望できる郊外の丘陵地に設けられた岡崎地域文化広場の一角にある。５万 4628・という広大な地域文化広場の敷地内には、芸術の森、展望の丘、モニュメントが配置されたふれあい広場、野外ステージなどが作られている。美術博物館は、その中心的施設として 1985 年５月にオープンした。美術博物館の建物は、愛知県と岡崎市とが共同で建設を行ったものであり、県の事業としての「おかざき世界子ども美術博物館」と、市の事業である「親子造形センター」とを連結させている。

・活動の概要

施設の機能としては、「THINK ゾーン」と「SEE ゾーン」と呼ばれる美術博物館と、参加体験型のスペースの「DO ゾーン」の３つのゾーンを一体化させている。これは子どもたちが美術の鑑賞をするだけでなく、感動の新たなうちにその場で創作活動ができるようにとの考えに基づくものである。

THINK ゾーンでは､・古代から現代に至る、美術写真による年表的構成による紹介と ､に、造形材料・素材などを実物展示した「美術のあゆみ」コーナー　・手軽な作画ができるコンピュータ・コーナー　・世界の美術教科書、子どもの絵本、美術・美術教育関連図書を収集した造形資料室がある。

SEE ゾーンには､・世界の著名な芸術家の子ども時代の作品　・原始美術品の展示（アフリカ、南太平洋諸島民族の祭具・仮面・土器・装身具）　・63 ヶ国から収集した玩具・民芸品　・97 ヶ国から収集した世界の児童画、などをコーナーに分けて常設展示してある。

DO ゾーンである親子造形センターは、第一造形（工作）第二造形（粘土）第三造形（絵画）の３つの教室および視聴覚教室からなる。・第一造形（工作）では、低学年児童を対象にした紙やウレタンを使った工作､伝承的玩具や民芸品制作の作り方の指導。・第二造形（粘土）

では、低学年児童を対象にした粘土遊び、高学年児童には一般陶芸並びに立体陶画の創作についての指導。・第三造形（絵画）はハンカチやＴシャツに短時間でプリントするアート染め。絵バッジや描いた絵を下敷きに加工するラミアート。科学石膏板に描き、陶画のように仕上がる EB（電子線）アートなどを制作することができる。
工作・粘土・絵画の３コースは、来館した親子がいつでも気軽に創作活動が出来るように通常カリキュラムとして設定されている。３つの造形教室とも一定の完成度を求める内容のものは３～６回の講座に組んであり、夏休みなどには特別および臨時の講座も開かれ、来館者の要望に応えるようになっている。指導には退職した美術や木工の教員５名があたり、制作活動をサポートしている。

・造形活動の特徴と問題点
DO ゾーン（親子造形センター）は、「美術博物館とその周囲をとり巻く豊かな造形環境の中で、SEE,THINK ゾーンで得た感動をもとに、親と子が心をふれあいながら楽しく絵を描いたり、物を作ったり、創造力を高めていく場 」として設定されている。教室も広く設備・機材も充実しており、土・日には親子が連れだって来館し、学校や家庭では経験しにくい素材を使った造形活動に取り組んでいる姿が見られる。市民運動の成果として、地域に根ざした活動を基盤とし、さらに国際的視野を持つものをというねらいには先見性が伺えるが、運営自体にはさまざまな問題を抱えている。
親子造形センターでは、子どもとその親に視点が置かれ、基本的には教育組織との連携は考えられていない。自然環境には恵まれているものの、市街地からは遠く離れており交通は不便である。交通手段としては最寄りの駅からのバスがあるが、日に３便しかなく、子どもたちが日常的に気軽に訪れるような立地条件にはない。また平常時の学校単位の利用も、団体輸送の交通費の問題からも現実的とはいえない。したがって利用者は、学期間中は幼児と親の造形活動が中心となり、休日あるいは長期休暇の期間の特別講座などを除けば、積極的な利用がなされているとは言いがたい。
造形活動の内容にも、そこに如何なる意義があるのかが不明確なところがある。材料費相当のチケットを自動販売機にて購入し、見本を参考にしたセット化された材料による制作活動は、学校教育の現場に見られるセット教材をイメージさせるものがある。そこにはカリキュラム・教材開発の不備が感じられ、親子造形センター自体の姿勢が明確に現れていない。

２、こどもの城

・設立の背景と目的
こどもの城は、1985 年 11 月、東京・渋谷にオープンした。この施設は、厚生省が国際児童年を記念して建設したものであり、財団法人日本児童手当協会（日本の出生率の低下により、政府からの児童手当金の余剰分が年々ストックされてきたものをなんとかうまく社会に還元しようと設立されたもの）が運営している。こどもの城は、17 歳までを対象とした、子どもの精神と肉体を健全に育成するための多角的・総合的な施設であり、芸術・科学・体育・保健・保育など、子どもの文化と福祉のための設備が総合的に整えられている。全国約 4000 の児童施設、児童館（約 500）の総本山的な位置にあり、各地と連絡・交流し、児童の文化・福祉に関する情報交換や研修活動を続けている。造形事業部のセクションでは、子どもたちが「見る・触る・つくる」ことによって、また、作った物で遊ぶことで、

自由で新鮮なイメージの広がりと創造の楽しさが体験でき、併せて集団としての活動の中から、社会性・協調性の育成を図ることを目的としている。

・施設概要
設置場所は渋谷の青山通りに面し､渋谷駅から徒歩 10 分という極めて交通の便の良い位置にある。施設は、地上 13 階建て、延床面積は４万平米強と大規模である。ここでの活動は大別すると４つのエリアで行われている。
・子どもの活動エリア
・動　　体育室（336・)、健康開発室（測定機器)、25・プール
・遊　　プレイホール（800・、空中チューブ・ネットなどの大型遊具）
　　パソコンルーム 25 台
・創　　造形ス ^ジオ
・歌　　音楽スタジオ A、B、シンセサイザー室、個人練習室、和洋楽器 1200 点
・見　　AV ライブラリー（35 ブース)、ソフト（6000 タイトル)、映像制作室
・小児保健・保育エリア
・小児保健・クリニック　言葉、知的発達等の遅滞に関する専門医、保健婦による診療・相談・指導
・保育研究開発　　就学前の児童対象に、家庭を支援する保育プログラムの開発
・劇場エリア
・青山劇場　　最新の設備を誇る 1200 人収容の劇場。
・青山円形劇場　　舞台と客席パターンを自由に変えられる完全円形劇場
・サービスエリア
喫茶、レストラン、研修室、会議室、ホテル（65 名収容）
創造性や情操の育成、健康と体力づくりといった、子どもの育成のためのほとんどの領域をカバーする総合的な設備を備えており、年間の来館者数は 100 万人を越える。それぞれの施設には指導員数人が控えており、来館するこどもに対応している。

・造形事業部の活動の概要
造形活動に関するスペースは、３階に位置する「造形スタジオ」と、１階エントランス脇の「ギャラリー」で行われている。「造形スタジオ」は、なだらかな曲面を持つ壁に囲まれたワンルームを可動式のパネルによって仕切り、プログラムに応じた柔軟な活動を可能とさせている。ここでは主に個人の造形活動の場としてさまざまなプログラムが実施されている。
・一般来館児プログラム
　造形スタジオの最も基本的な活動であり、年齢を問わず来館する全ての子どもに向けて設定されるものである。内容は「くむ」「つつむ」「きる」などテーマを設定し、比較的手軽に制作できるプログラムが主体となっている。子どもたちは、同時に設定されている３種類ほどのメニューの中からいずれかを選択し、インストラクターの実演による制作手順の紹介を受けた後で、用意されている材料・用具を使って制作活動を行う。約 30～40 分ほどで完了出来る内容が多い。
・グループ活動

15～30 名のグループによる集団的な利用形態で、園単位、学級単位での利用に適したプログラムである。１週間のうち２回、午前中で、造形スタジオのプログラムによる指導型のグループ活動である。
・オープンスタジオ
春・夏の学校が休みの子どもたちが十分に時間的に余裕のある期間に展開される。木、土、紙、プラスチック、金属など素材によって製作台が区別・配置されている。各製作台には、活動の意図と工程が指示されていて、参加者は自分の作りたいコーナーで作業する。各コーナーのプログラムは年齢で創作に差別が出ないように子どもたちの力に応じて柔軟に対応できるような配慮がしてある。
・こどもクリエイティブクラブ
小学生を対象とした、素材との新しい関わりや発想の広がりを大切にしながら、見る、聞く、感じるなど全身の感覚を使うプログラムである。毎週１回、３回で１テーマを完結する内容。その後、制作内容に広がりとゆとりを持たせるため、７～10 回で完結する形式になった。
・造形講座
子どもの造形活動の理解あるいは現代造形の理解のために、大人を対象とした講座である。毎週１回 12 回で完結する。美術教育の啓蒙的活動を担っている。
・「ギャラリー」は、１階から２階にかけての螺旋型のスペースを持ち、主に展示活動に使用される。モニタなども併用し、いわば科学館的な雰囲気を持たせた、見て・触れて理解するハンズオン・タイプの展示形態が多い。

・造形活動の特徴と問題点
こどもの城全体の巨大な規模から見れば、造形スタジオのスペースは決して十分な広さとはいえない。とはいえ、長さ 17・の落書き可能なプレイングボードや機能的な作業台の配置により、子どもたちにとっては、ある程度の開放感の中で活動することができる。造形スタジオでのプログラムは、来館した子ども個人の自主的な活動をベースにしており、学校教育組織など外部団体との連携は考えられていない。教育機関からは全く独立していることが、独自の活動を展開しうる要素にもなっている。来館する子どもたちへの日常的な対応と共に、スタッフによるオリジナルなプログラム開発や研究活動も盛んに行われている。「造形発見展」のワークショップも、テーマを明確に解説したパンフレットを作成するなど、活動記録の整理といった面でもしっかりした運営がなされていることを感じさせる。一般来館児プログラムでは、人間の手仕事の動作をテーマに、素材が備えている可能性を柔軟に引き出させるような試みが多い。「素材との出会い展」「造形発想展」「オープンスタジオ」など、年間に３回行われるワークショップでは、素材からの造形の可能性、素材と用具についての視点など、素材からいかに発想するかといった構成教育的視点および現代美術への関心が強く現れている。開館時の記念企画ではイタリアのデザイナー・造形作家であるブルーノ・ムナーリの展覧会やシンポジュームが行われたが、以後の企画においても類似した傾向が続いている。造形の原理 I な発想作用を重視した、ややこじんまりとしたデザイン的活動をベースにしており、ダイナミックな造形活動とは異なっている。大都市の一等地に位置した巨大なビルの中の遊園地といった雰囲気の中では、子どもたちが造形素材とゆっくりと対話するといった、穏やかな心のゆとりは持ちにくい。設定されているプログラムがなにか既製品的・商品的なイメージを与えてしまう点の改善は、今後のカリキュラム開発の課題といえよう。

３、子どものアトリエ

・設立の背景と目的
横浜美術館は、21 世紀に向けて新しい都心作りをめざす横浜を象徴する新機能をもつ大規模な美術館で、都市再開発中の「みなとみらい 21 地区」の中心に 1989 年３月に開館した。港を基盤として発達した横浜の国際性を生かし、国際文化都市の観点から市民に開かれた美術館・市民に向けて活動する美術館として建設されたものである。延床面積２万 6829・、運営は財団法人横浜市美術振興財団が行っている。横浜美術館は「観る・創る・学ぶ」の３つの機能を果たすために、学芸部門、アトリエ部門、情報センター部門が独立して設置され、それぞれ相互の連携によって運営されている。「観る＝学芸部門」は、20 世紀美術および写真が中心のコレクションとし、作品収集と鑑賞の場を提供する。「学ぶ＝美術情報センター」は美術図書館・美術情報ギャラリーとして施設対応している。「創る」部門は、「子どものアトリエ」と「市民のアトリエ」の２つで構成されたセクションである。
美術館に子どもの施設を併設させるという考え方は、昭和 56 年の横浜美術館の基本構想の答申当初からあった。そこでは「メトロポリタン（教育）+ポンピドウ（遊び）のような 」という海外の先進例を参考に新しい美術館をめざす意欲が感じられた。その答申を具体化するために美術教育関係者による「子どものアトリエ研究会」が組織され、施設、設備、活動内容（カリキュラム）、運営システムなどに関して各委員会による具体的な調査・検討活動が行われた。約５年間にわたる準備期間を経て、学校教育との連携、ダイナミックな素材体験型活動の重視など、従来の美術館教育を乗り越える積極的な方向性が実現されることとなった。

・こどものアトリエの施設概要
アトリエセクションの１階は子ども用、２階が大人向きの市民のアトリエとなっており、出入口は美術館のメインエントランスとは別に設けられている。こどものアトリエは、アトリエ A、アトリエ B、視聴覚室、準備室からなり、総面積は 746・である。
アトリエ A は、プレイルーム的機能を持たせてあり、全面ガラスを隔てた中庭と自由に行き来できるようになっている。ここでは幼児たちが全身を使った自由な造形活動が体験できるように、体の汚れを洗い流せる大きな水場・シャワー室が設備されている。アトリエ B は、イーゼルや作業台を使用する絵画や工芸制作を可能とするスペースとして設定されており、一般的な美術・図工室の雰囲気を持つ。視聴覚室は、ミラーボールやブラックライトなどの照明器具が設備され、椅子や机を並べた映像鑑賞ではなく、床面を多面的に活用し光遊びや小劇などがおこなえるようになっている。

・活動の概要
こどものアトリエは４～12 歳児を対象としている。中学生は市民のアトリエを使用することを前提にすることで、子どもに特有の造形活動をより限定した内容として扱うことを可能としている。こどものアトリエは恒常的には４つの事業を行っている。
・学校のためのプログラム
保育園・幼稚園・小学校と連携しての活動で平日に行われる。各学校からの利用申し込みは、前年度末に確定し、利用２週間前にアトリエのスタッフと学校の教師との打ち合わせ

が行われる。内容としては、素材そのものに働きかける行為自体を重視したものが多い。模造紙や新聞紙を切り、丸め部屋いっぱいに張り巡らすこと。段ボールを切り抜き、組み合わせペイントすることによる装飾された巨大迷路。全身を筆代わりにし、床一面に拡げられた紙へのアクションペインティング。抱えきれないほどの粘土を使っての全身体験など、高い天井と広いスペースという、教室とは違った場の機能を生かし、ダイナミックで自由な造形活動が実施されている。

・個人の造形プログラム

個人レベルでの応募による造形講座で、日曜日あるいは長期休暇期間中に開設される。制作方法を明示した活動であり３種類用意されている。「わくわく日曜造形講座」は、クラフトクラブ（木材工作､）・粘土クラブ（陶芸）など、流木や木の枝あるいは粘土など、素朴な原材料を使用しての作品作りを行う。「長期日曜造形講座」は、日本画を描くといった例のような、技術・技法的な観点から捉えた実技講習会であり、比較的長期間（９回程度）を費やして行われる。「夏休み造形クラブ」は、夏休み期間中の連続した３日間で実施される。七宝焼、水彩画など内容は幼稚園・小学校低学年・高学年別に設定されている。定員は 10 名ないし 20 名となっており、従来の「絵画教室」的な内容のプログラムであるといえる。

・親子のフリーゾーン

子どものアトリエの場所と素材を提供する、無料で自由参加できるプログラムである。月に３回、日曜日午前中に実施されている。低学年向きに設定されており、粘土・紙・絵の具などを使って、親子で自由な造形遊びを楽しむことができる。フリーゾーンでは参加者の自由な活動が目的であり、スタッフは基本的には指導を行わず要望がある時のみ対応をしている。

・教師のためのワークショップ

　年８回、土曜日の午後スタッフと教師のためのトレーニングの場として設定。「読んで学ぶ」「描いて知る」「素材で遊ぶ」の３コースが用意されている。

・造形活動の特徴と問題点

こどものアトリエの活動の特徴は、第一に学校との連携という面にあろう。学校での図画工作のいろいろな制約を外して、自由な造形体験の場を用意することが施設プランの基本にある。開館当初は、平日の学校利用の機会を危惧する旨もあったようだが、現在では年度初めに年間利用スケジュールは埋まってしまうほど活用されているとのことである。横浜の再開発地区とはいえ、平日の授業時間の中で訪れることが可能な学校は極めて限られている。遠足や社会見学といった名目により利用する場合も多いようだが、子どもたちにとって有効な活動の場であることが認識されるがゆえに、学校現場から期待されるようになったのであろう。子どもたちの自由な活動と自主性を尊重するためには、その背後に多くの大人たちの裏方的作業が必要とされる。子どものアトリエの準備室の設備自体は、それほど充実したものとは言えない。子どもたちが直ぐに使用できるよう粘土を練り直すこと、大量の絵の具を用意すること、木片を適当なサイズに切りそろえることなど、準備から後片づけにいたるまで、年間を通じてのプログラム内容と離れ難く結びついた地道な作業が多くある。設備を初め人的支援からも、学校現場では、子どもたちのダイナミックな活動を裏付ける背景が圧倒的に不足している。こどものアトリエが活況を呈していることもその現れであろう。

子どものアトリエの特徴の二点目は、従来型の美術館と統合されていることにより、実技

体験と鑑賞活動とを融合させた新たな活動体験の機能が期待されたことである。「子どものアトリエが美術館に付設されることは、単に子どもたちの造形活動の場であるのではなく、子どもが大人と互いの造形性に拠って本質的に出会うことが可能な場であると考えられる。子どもを造形教育という造形活動の中に押し込めておくことはない。造形そのものに羽ばたかせるべきである。美術館は子どものアトリエをもっているのであり、子どものアトリエは美術館をもっているのである。 」研究会の時点から強く求められていた、美術館の中にあるという条件を生かす試みは、全てが実験的な独自の活動である。しかしながら展示セクションとアトリエセクションとの部門としての交流や企画はまだスムーズに行われていないようである。鑑賞活動と造形活動との間を如何につなぎ共有化していくかの問題は、学芸員と教育学芸員あるいはインストラクターとの、造形教育についての活動認識の相異の問題でもあり、今後の展開を待たねばならないだろう。

・、創作・体験型施設の考察

１、体験型ミュージアムの多様性

前章で取りあげた３施設とも、創作・体験活動を重視した新しいタイプの施設である。設立の際に参考にしたのは「ポンピドー国立芸術文化センター」 であったとされる。ポンピドーセンターの「子どものアトリエ」における、芸術表現のさまざまな分野にわたる遊び体験を重視した運営の方向性は、わが国で以後に新設された文化施設において、子どもの活動や教育についての視点を開かせることとなった。将来的には、このような「体験」活動をキーワードにした子どものためのミュージアムが増加することが予想される。

造形活動以外の分野では、「体験的ミュージアム」と呼ばれる施設は、すでにさまざまなものが存在している。例えば、子どもを主たる対象者とし教育活動を重視した施設には、理工学系博物館に属する「青少年科学館」がある。科学博物館は体験的要素を強く持ったミュージアムである。 実物や模型に直接触れたり操作することで、実感を伴った認識を促す体験的な展示が多く親しみやすい。また、来館者を参加させた実験のデモンストレーションなど、より楽しく学べるような工夫が随所に凝らされている。昨今の若い世代の間での理工系離れへの危機感から、物理学会・応用物理学会・物理教育学会の三学会が 1994 年 4 月に深刻な問題であるとの共同声明を出した。学校で学ぶ理科のイメージを変え、楽しむものとしてのサイエンスの認識への転換を図るための科学館のリニューアル化がさらに進められている。

科学館は、サイエンスの領域にテーマを絞ったものであるが、従来のミュージアムに一般的な、科学、美術、文学、民族の文化などといった、ジャンルによ 驪謨ɪにこだわることなく、幾多のジャンルを併存させ、それらのつながりを広く見せるスタイルを取るミュージアムが存在する。それらの多くは明確に子どもを対象としたものであり、「チルドレンズ・ミュージアム」と呼ばれている。この呼称には、館の名称自体にチルドレンズを付けることで対象者が子どもであることを明確に示す施設と、利用者としての子どもたちの存在を強く意識した配慮がなされている施設の両者を含んでいる。現在のアメリカ国内には 200 館を越えるチルドレンズ・ミュージアムが存在すると言われている。

1913 年に基礎が作られたボストン・チルドレンズ・ミュージアムは、世界のチルドレンズ・ミュージアムの草分け的存在として知られる。60 年代に館長として就任したマイケル・スポックが打ち出したコンセプトは、その後の多くのチルドレンズ・ミュージアムに影響を与えている。スポックが活動の理念としたのは、「自発的に見て・触れて・試して・理解す

る」という一連の行為を重視したハンズ・オン（体験学習）であった。五感の重視。体験し参加するミュージアムは、現在の子ども自身が現実の生活や社会を正面から見つめ、今を如何に生き抜いて行くのかという視点に立っている。
それに対し、アメリカの各地に設置されている、「ジュニア・アートセンター」は美術・音楽・言語など、芸術を中心に、制作活動とあわせて展示などを行っており、主に創作・表現活動を媒介させる点で、チルドレンズ・ミュージアムとは異なるといえる。プログラムに関しては、俳優・音楽家・作家など地域のアーティストなどと共同してのさまざまな活動が行われている。周辺の学校教師との協力態勢の中で、感覚や全身を動員してのワークショップなど、子どもたちが楽しく過ごす中で芸術についての学習活動がなされるような工夫が施されている。

２、「ハンズ・オン型」と「表現型」
以上の例が示すように、科学館やチルドレンズ・ミュージアムなど、体験的ミュージアムの一般的な「体験活動」は、「ハンズ・オン」が基本にあるといえよう。すなわち、内容を観念的にではなく実感として伝えるために、ハンズ・オンの手法で展示物が活用されており、展示物や用意された事物を、実際に操作する中で発見し感じ取らせる活動を重視する。
その一方、ジュニア・アートセンターでは、素材を加工して作品化する、あるいは身体活動により表現を行うものであり、学校での図工・美術の授業で行われている活動と類似している場合が多い。これらの活動は、「表現型」の体験活動と呼びうるであろう。前章の３つの施設で実施されているプログラムを検討してみると、・日常的プログラム（一般来館者のための短時間プログラム）と、・長期間をかけておこなう講座形式のプログラムの２種類がある。講座形式のプログラムは、「表現型」といえるが、前者の日常的プログラムは、自己表現的な内容面での深まりに至らないものが多い。つまり一見表現活動を行っているように見えながら、実はその活動は、子どもが科学館で模型を操作する活動、すなわちハンズ・オン的体験に近いと思われる。
例えば、粘土板と抜き型が用意されたプログラムの場合、子どもたちは、粘土板を円や四角に型抜きし、ドベを塗って張り合わせる作業を楽しげに行っている。しかし、そのプロセスや手触りは楽しんでいるものの、創作活動としての思い入れは、いたって稀薄であるように見える。そこでの子どもたちの活動は、自己を表現する活動とはやや次元を異にしているように見える。
「表現型」体験活動には、経験を個人の内部で熟成させるための時間的プロセスが必要である。試行錯誤やフィードバックなどを行いながら、じっくりと経験を積み重ねていくような活動は、継続的教育活動が可能な学校教育でこそ効果が発揮される内容であろう。ミュージアムにおける造形教育と、学校での造形教育とが、どのような関係に置かれるべきかは、かねてより課題とされてきた。体験的ミュージアムにおける「日常的プログラム＝ハンズ・オン型」では、原材料的素材への接触経験や、簡単な加工を通じての造形原理の理解などの面で、従来にない斬新な切り口が伺えるものが多くある。そこでは、プログラムの目的と教育的配慮がいたって明確なものが多い。子どもたちが楽しみながらも、何か醒めた姿勢を持つことを感じるのもそこに理由があるのかも知れない。子どもたちのそうした反応からは、「学校という制度が持ついろいろな制約の中で図工・美術教育を工夫せざるをえない教師」とは異なる立場や発想によるアプローチが行われつつあることを感じる。造形活動を知的遊びとして捉えたり、造形とは直接関わりのないものを造形と結びつけることにより新しい発見を促すプログラムなど、ハンズ・オン型造形教育は、従来の情操教

育的観点が強い、学校の造形教育には見られなかったタイプである。
体験的ミュージアムは､設置にいたる経緯や設立の目的･主体がそれぞれに異なっており A一つとして同じものはない。施設の地理的環境（交通アクセス)、地域の文化的背景、周辺施設との関係など、さまざまな要因により、施設設備や運営方法に相違が生じることは当然である。現状では、まだそれが創作・体験活動のプログラムやカリキュラム内容の差異として明確に現れている。しかし今後、蓄積したプログラムやアイディア、あるいは知識の複数の機関における共有化が進めば、たとえ小規模の施設であっても、学校とを結んだプロジェクトや教師の再教育などの面でも、有効な機能を発揮出来ると思われる。体験的ミュージアムは、「子どもの造形活動が可能な場」としての存在のみならず、「ニュータイプの造形教育の研究・実践機関」としての独自の位置づけがなされる必要があろう。その認識が確立されることによって、来館した児童のみならず教師や父母に対しても造形活動への啓蒙的役割を果たす大きな可能性が予感される。

おわりに

公立学校ならば、日本中どこを見ても画一的であるし、従来型の美術館もほとんどが類似した施設と機能を持っている。しかし、本稿で扱った新設されつつある施設は、設備にしても運営方針にしても全く異なっている｡このような多様性は､いずれの施設においても、設立の背景や目的を「内側から」主体的に検討したことの現れであろう。そのような中で工夫し生み出されてきたプログラムは、絵画や彫刻といった、従来の美術のアカデミックなスタイルとは異なる内容を持っている。日常生活や自然環境、あるいはサイエンスとの関係などをアートを通じて考えさせるための新しいタイプのプログラムが試行されつつある。惜しむらくは、これまではプログラム開発に追われて、実践内容の検証と公表が不足していたことである｡学校外の機関における､柔軟性に富んだ新しい試みが広く公表され、学校の造形教育に刺激を与えることになれば、現在の硬直化しつつある状況の改善につながるものと考えられる。

【註】
・『おかざき世界子ども美術博物館・概要集』、おかざき世界子ども美術博物館編集・発行、1986.6、 p.7
・三ツ山一志、「体を、心を、動かす冒険」DOME、３号、日文、1992.8、p.13
・海野阿育、『「子どものアトリエ」調査委託報告書』、子どものアトリエ研究会発行、昭和61年3 月、p.7
・「ポンピドー国立芸術文化センター」は、美術館、工業デザイン、図書館、音響研究所、子どものアトリエ、言語研究所、映画館を併設し、多量域・多価値的企画活動を実践しており、国際的な評価を確立している。ポンピドーセンターは、従来のミュージアムのイメージを払拭し､現代文化のセンターとして大衆に直結した先端的な企画と運営により､1977年２月の開館以来毎日２万人を越える来館者を迎えている。千人を越える館員により運営され、芸術表現を網羅的にカバーする「総合的複合型施設」である。
・日本の科学博物館は、第二次大戦後の科学技術の振興がうたわれたことに伴い、1955年頃から各地に建設されたものである。そこでは､・科学あるいは技術の発達資料の収集・展示と､・科学の原理を理解させるための実験装置や解説装置、模型等の考案と設置、との２

点が重要な活動であるが、日本の理工学系博物館は、前者の機能を持つものは少なく、後者の科学の諸原理を解説することに重点を置くものが多い。
・アメリカにおいてチルドレンズ・ミュージアムが設置されている理由には、現在のアメリカの悪化した治安状況を背景にし、「子どもたちが安心して遊べる」場所としてのニーズに起因するものもあるが、多民族国家としての事情が、他国とは異なる事情としてあげられる。国外からのあらゆる人種の流入によって成立しているアメリカには、異なる民族における宗教・文化などのバックグラウンドの相異から生じた、多民族国家が抱える数々の問題がある。チルドレンズ・ミュージアムには、それらの理解を促す目的がある。
＜本学助教授　釧路校＞